

モルズワース夫人の児童書における挿絵画家(2)

— 英国ヴィクトリア朝における女性挿絵画家 —

木原 貴子

Illustrators in Mrs Molesworth's Children's Books (2) : Women's Illustrators in Victorian Britain

Takako KIHARA

ルイーザ・モルズワース夫人 (Mary Louisa Molesworth, 1839-1921) の作品を最も多く手がけ、最も有名であったのはウォルター・クレイン (Walter Crane) であるが、その他にもヴィクトリア朝を代表する挿絵画家たちが彼女の作品を彩っている。例えばゴードン・ブラウン (Gordon Brown) である。彼はチャールズ・ディケンズの挿絵で有名なフィズ (Phiz) の息子として、「英国で最も才能があり、多作な挿絵画家の一人」という言葉通り、この時代を代表する挿絵画家であった (Doyle 315)。更にキングスレイ (Charles Kinghley) の『水の子』 (*Water Babies*) の挿絵でも知られるノエル・ペイトン (Noël Paton)、ネズビット (Edith Nesbitt) の作品を手掛けたミラー (H. R. Millar)、或いはレズリー・ブルック (Leslie Brooke) など、錚々たる名前を認めることができる。こうした著名な挿絵画家を始め、モルズワース夫人の作品の挿絵画家の数は、およそ30人にも上ると考えられる。このような数多くの挿絵画家の中で、ウォルター・クレイン以外に彼女の作品をより数多く手がけているのが、ロバート・バーンズ、レズリー・ブルック、メアリー・エレン・エドワーズ、そしてガートルード・ハモンドの四人である。彼ら全員が時代を代表する有名な画家たちではないが、ある者はその量において、或いは作風において、そして少なくともモルズワース夫人という流行作家の作品を飾るという意味で、この時代を反映し、そして表現する画家であると考えられるであろう。そこで、彼らそれぞれの特徴やモルズワース夫人との関係を考察することによって、画家たちの背景からは当時の社会事情を、そしてそれぞれの挿絵からは当時の家庭像等、すなわちヴィクトリア朝という時代の特徴を垣間見ることができるのではないだろうか。

1. モルズワース夫人を彩る四人の挿絵画家たち

モルズワース夫人の児童書の出版を始めたマクミラン社 (Macmillan) によって、ウォルター・クレインの後継者として彼女の挿絵画家に抜擢されたのが、レズリー・ブルック (1862-1940) であった。彼は1889年、27歳の時に本格的に挿絵を始めるが、わずか二年後の1891年、29歳の若さでクレインの後を受け、1897年までの六年の間に、モルズワース夫人の作品を八作手がけている。ウォルター・クレインとモルズワース夫人が、有名な挿絵画家と新人作家という関係であったのに対し、レズリー・ブルックとモルズワース夫人は、すでに人気作家になっていたモルズワース夫人に期待の新人挿絵画家ブルックを組み合わせるといったものであった。

それゆえ、ブルックに関して「クレインの後継者」という表現がなされることがあるが、作風という点では、ブルックはむしろユーモア溢れるゴールドコット (Randolph Caldecott) に影響を受けている。



Leslie Brooke: *A Nursery Story*



Leslie Brooke: *The Carved Lions*

レズリー・ブルックはミード (L. T. Meade) の『ルビーの指輪』 (*A Ring of Rubies*, 1892) やエドワード・リア (Edward Lear) の作品 (*The Jumblies and other Nonsense Verses*, 1900) 等の挿絵を手がけているが、代表作は 1903-35年にかけて自ら文章も書いた『鳥のジョニー』 (*Johnny Crow*) シリーズであろう。楽しい文章もさることながら、洋服を着た動物たちのユーモアに溢れた姿が子供たちの心を引き付けた。ネズビット (Elizabeth Nesbitt) は『ホーンブック』 (*Horn Book*) の中で、ハワード・パイル (Howard Pyle) やベアトリクス・ポター (Beatrix Potter) と並んで、当時の三大挿絵画家の一人としてブルックの名を挙げ次のように述べている。

[Brooke] possess(es) the lovely quality of gentle and endearing humor, the faculty which allows the imagination to play with the content of the story or rhyme being illustrated, the mastery of the right kind and amount of detail, the ability to picture beauty in the background and setting, and yet keep background and setting unobtrusive. These qualities are still the essential traits of a true picture-book. (Williams 58)

「穏やかで絶えまないユーモア」や自由な想像力、美しい背景や設定を描く才能といった児童書に欠かすことのできない資質を兼ね備えた挿絵画家として、ブルックの絵は子供にこ

れまでにない、非常に愉快的な世界を供給しているのである。そして、こうした才能はモルズワース夫人の挿絵にも遺憾なく発揮されている。

Mr Leslie Brooke succeeded Mr Crane in 1891 as the illustrator of Molesworth's stories, and the careful un-selfconscious fashion of his drawing, his understanding of child-life and home-life as known to children such as those of whom and for whom Mrs Molesworth writes, make pen-drawings true illustrations of the text. (Sketchley 264)

マクミラン社から出版される作品にはブルックが挿絵を付けているのに対し、チェンバー社 (Chambers) はロバート・バーンズ (Robert Barnes, 1840-95) に挿絵を依頼している。バーンズは1865年に描いた『イギリスの生活画』(Pictures of English Life) が代表作と考えられ、1880年代までにはすでに挿絵画家としての人気を勝ちえていた。クレインを起用したマクミラン社と同様に、チェンバー社もモルズワース夫人のために、挿絵画家として、確固たる地位を築いていたバーンズを起用したのではないだろうか。

「英国の土壌から真っすぐに育った人間というものが存在するとするならば、それはロバート・バーンズによって描かれた男性であり、女性であり、また少年少女である」というフォレスト・レッド (Forrest Reid) の言葉は、バーンズの絵が如何に当時の人々の様子を的確に捉え、表現していたかを如実に表している (Reid 256)。彼は『コーンヒル・マガジン』(The Cornhill Magazine) を中心的な活躍の場とし、『ワンス・ア・ウィーク』(Once a Week) や『クイヴァ』(The Quiver) などにも素晴らしい挿絵を提供している。その一方で、彼の画風は「感傷的すぎる」(“over-sentimental”) とか、「安物のメロドラマ」(“cheap melodrama”) といった言葉で評され、更に次のように厳しい批判も受けている (Goldman 137-8)。



Robert Barnes: Olivia

[Barnes's] men and women and boys and girls are so limited in type that they might nearly all be members of a single family — a family of the well-to-do farming class, healthy, sturdy, producing no disquieting variations from the sound yeoman stock that has reached back from generation to generation. (Reid 256)

バーンズの挿絵は読者の目に心地良い、調和のとれた絵ではあるけれども、同時に彼が描く人物は皆「裕福で、健康的、丈夫で健全な田舎の一家」の一員、つまりは同じ顔つき、

同じ雰囲気であり、個性が欠如していると指摘されているのである。またバーンズの描く子供像についても、彼等は「日々の苦悩や精神的、知的情熱に決して動かされない子供」であり、「考えられる限り、純然たる小動物」(“the most unmitigated little animals conceivable”) のようであると述べられている (Reid 257)。このことは「物語の挿絵」という性質を考慮しても、バーンズの描く子供像が、ワーズワスの、純粹で無垢な、余りにも理想の子供と見なされていたことを示しているのではないだろうか。しかしながら、ジョン・ラスキン (John Ruskin) の次の言葉を鑑みれば、当時はむしろこのような子供像が求められていたことがわかるであろう。



Robert Barnes: *Blanche*



Mary Ellen Edwards: *Little Mother Bunch*

...I am grieved to omit the names of many other artists who have protested, with consistent feeling, against the misery entailed on the poor children of our great cities, — by painting the real inheritance of childhood in the meadows and fresh air. (Ruskin 143)

ラスキンはアリングガム夫人 (Mrs Allingham) やグリーンウェイ (Kate Greenaway) を取り上げ、彼女たちの挿絵を称賛し、上のように述べている。しかしバーンズも「名前を省略」された、美しい子供たちを描いた挿絵画家の一人と言えるのではないだろうか。

モルズワース夫人は多作の作家と呼ばれ、百冊以上の作品を残しているが、挿絵画家として多作であったのは、メアリー・エレン・エドワーズ (Mary Ellen Edwards, 1839-1910) である。彼女はクレインと並んで、モルズワース夫人の初期の作品に挿絵を提供しているが、その出版社は、ルートリッジ社 (Routledge & Sons) を始め、ハッチャード社 (Hatchards)、ハッチンソン社



Mary Ellen Edwards: *Little Mather Bunch*

(Hutchinson & Co)、ロングマン社 (Longman) など、様々な出版社から依頼されている。このことは当時の彼女の活躍を裏付けるものではないだろうか。

... [Edwards's] work appears throughout the sixties, seventies, and eighties in innumerable story-books and magazines for children, and in nearly all the magazines for older readers from *The Quiver* to *The Graphic*. (Reid 261)

彼女は60年代から80年代にかけて『クイヴァ』から『グラフィック』(*The Graphic*)に至るまで、つまり子供のための本や雑誌から、もっと年長の読者向けのほとんどの雑誌に数え切れないほど挿絵を描いていた。彼女が掲載した雑誌は、上述した二誌以外にも『ワンス・ア・ウィーク』や『グッド・ワーズ』(*Good Words*)、『ロンドン・ソサイエティ』(*London Society*)や『サンデー・マガジン』(*The Sunday*

Magazine)、『アント・ジュディー・マガジン』(*Aunt Judy's Magazine*)や『イラストレイテッド・タイムズ』(*Illustrated Times*)等、名だたる雑誌が軽く25誌を数え、「エドワーズは当時の挿絵本の多くに貢献している」のである (Reid 261)。

エドワーズは絶えず「かわいい女の子」(“pretty maiden”)を描き続け、彼女の筆から生まれた少女たちは「優美さ」さえも備えており、人気を博していった。しかし、画一的な作風は彼女の評価を変えていったのである。

... [Edwards's] work decreases in interest — not because it ceases to exhibit the qualities that made it so popular, but because the constant repetition of a single note inevitably begins to pall, and in the end produces an effect of weakness. (Reid 261)

1870年頃から彼女の人気は衰えていったが、それは一つの特徴が絶えず繰り返されたからである。読者が彼女の挿絵を目にする機会が余りに多かったことで、不評になってしまったのかもしれないが、このことは一方で、彼女がそれだけ長く人気のあった挿絵画家だったことを示しているのではないだろうか。

マクミラン社から出版されるモルズワース夫人の児童書は後年、H. R. ミラーなどの世に知られた挿絵画家たちが手がけると同時に、ロージー・ピットマンやアリス・ウッドワード等の女性挿絵画家も彩っている。そのような女性挿絵画家の中で、モルズワース夫人の最晩年の作品に挿絵を付けたのが、ガートルード・ハモンド (Gertrude Demain Hammond, 1862-1953) であった。彼女自身について詳しい資料は残っていないが、一つ年上の姉であるクリスティン・ハモ

ンド (Christine Hammond) も挿絵画家として活躍していたことから、家庭環境に彼女たちを画家へと導く要因があったと考えられる。ロンドン生まれのハモンドは、王立アカデミースクール (the Royal Academy Schools) で学び、1892年 (30歳) 頃から挿絵の仕事に従事し始めた。とりわけ彼女の描く「女性像」は高く評価されている。おそらく技法の向上や時代の嗜好も関係しているであろうが、同時代の他の挿絵画家と比較すると、彼女の画風は極めて写実的で、より絵画的である。

彼女に対する評価に直接言及した資料はほとんどないが、モルズワース夫人の作品に対し、ウォルター・クレインやレズリー・ブルックに次いで、ハモンドの挿絵が多く使われているという事実は、彼女の挿絵が読者に人気があったためか、或いは作家としてモルズワース夫人が気に入っていたためか、または出版社の意向のためか、理由は決して明確ではないが、いずれにしろ挿絵画家として、ハモンドの仕事は決して無視できないものであることを示している。そして、このようにハモンドが多くの挿絵を描いているにもかかわらず、その存在が現在知られていないことは、ある意味でヴィクトリア朝における女性挿絵画家の実情を象徴していると考えられるのではないだろうか。つまり、この時代の女性挿絵画家の多くは当時活躍していたにもかかわらず、現在ではほとんど記録もなく、顧みられることもないのである。



Gertrude Demain Hammond: *The Little Guest*



Gertrude Demain Hammond: *Fairies-of Sorts*

2. ヴィクトリア朝における女性挿絵画家

モルズワース夫人の作品に挿絵を描いた画家の中には、メアリー・エレン・エドワーズやガートルード・ハモンドを初め、少なくとも七人の女性挿絵画家が含まれている。前掲した二人以



Mabel L. Attwell: *The February Boys*



Mrs Adrian Hope: *The Old Pincushion*



Rosie M. M. Pitman: *The Magic Nuts*



Alice Woodward: *The House that Grew*

外に、マーベル・ルーシー・アトウェル (Mabel Lucie Attwell, 1879-1964)、ホープ夫人 (Mrs Adrian C. Hope, -1929)、ロージー・ピットマン (Rosie Pitman, fl. 1883-1907)、アリス・ウッドワード (Alice Bolingbroke Woodward, fl. 1885-1920) などである。彼女たちの手がけた作品は決して多くはないが、各々に個性溢れる印象的な挿絵をモルズワース夫人に提供している。更に、19世紀の英国ヴィクトリア朝の女性を取り巻く社会環境を鑑みるならば、モルズワース夫人の作品を描いた、およそ30人の挿絵画家の中に七人も女性挿絵画家が含まれていることは、特筆すべき現象と考えられるのではないだろうか。つまり、女性挿絵画家の台頭は、19世紀という時代の一つの特徴と言えるのではないだろうか。では、なぜこの時代に女性挿絵画家が数多く活躍したのだろうか。

(1) 出版ブームと挿絵画家

1860年代をピークとして、英国ではこれまでに例がないほど多くの本や新聞、雑誌が出版された。例えば、新刊書の年間発行部数を比較したとき、18世紀末頃には年間平均370点余りであったものが、19世紀に入り1802-27年には年間平均580点となり、翌28年には842点、1853年には2530点にも上っている (谷田 11)。更に『ペニー・マガジン』(Penny Magazine, 1832年創刊) や『パンチ』(Punch, 1841年創刊)、『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』(Illustrated London News, 1842年創刊)、『ロンドン・ジャーナル』(London Journal, 1845年創刊) などの雑誌や新聞が30年代から40年代にかけて、次々に創刊されている。こうしたブームの要因としては大きく分けると、教育的・社会的要因、経済的・社会的要因、そして技術的要因が考えられる。

教育的・社会的要因としては、初等教育の普及によって、低年齢層のみならず労働者層に至るまで、識字率は向上し、それに伴い書物の需要が拡大していったことが考えられる。更に、19世紀に入り、印紙税法 (Stamp Duty) が徐々に緩和され、最終的には1855年に完全撤廃されると、本や新聞、雑誌の出版が安く、合理的に行なわれるようになり、一方蒸気動力の印刷機や輪転機の発明・改良によって、これまでの手作業と比較するとおよそ4倍の量の印刷が可能になったのである。そして、中産階級の経済的台頭、或いは経済体系の変化による人口の都市集中が読者層を一層拡大していった。こうした状況は、単なる「書物の増加」ではなく、「挿絵つき」の本や新聞、雑誌の増加を促していったのである。つまり、識字率の増加は確実に低年齢層の読者を増やし、それとともに値段の安さが下層階級における読者の拡大に拍車を掛けていったのであるが、その結果として、これまでの十分に教養のある読者とは異なり、文字だけでは十分に理解できない、或いはより深い理解のために視覚的情報を必要とする読者を生み出すことになったのである。また一方で、経済的に余裕を持ち始めた中産階級の人々は、自らのステータスを示すためにも、流行を詳しく取り入れた新聞、雑誌や、書齋を飾るためのより高価で豪華な本などを求めるようになっていったのである。こうして、19世紀英国では未曾有の出版ブーム、しかも挿絵つき印刷物ブームが起こったのである。

(2) 児童書の挿絵と女性挿絵画家

こうした「挿絵」を求める傾向が、児童書に於いてより顕著に起こったのは、児童書という性質上当然のことであった。例えば、ラスキンは講演の中で児童書について言及し、その中で児童書における挿絵の意義として「楽しさと教育」を挙げ、更に子供の想像力を養う上でも良い挿絵は重要であると述べ、家庭内だけでなく、一般社会においても挿絵付児童書の重要性が認識され、評価され、ますます挿絵に対する需要は伸びていったのである (Ruskin 117)。そし

てその結果、画家は挿絵を描いて生計を立てることが可能になり、「当時限られた職にしかつかなかった女性にとっても一つの選択肢となりえた」というルイーザ・スミス (Louisa Smith) の言葉通り、数多くの女性挿絵画家が、とりわけ児童書を手がける女性挿絵画家が登場することになったのである (Smith 312)。しかし当時の (男性) 社会は、女性に対し、所謂「家庭の天使」としての理想像を押し付け、彼女たちが職をもち、社会に進出することを拒み、妨げ続けていたことは否定できない事実である。

For women to paint, sculpt or design professionally in Victorian Britain was to challenge western beliefs about the nature and status of art. At the same time, it was to challenge women's economic relationship to society and especially to men, and the relationship women had to culture. (Nunn 1-2)

ヴィクトリア朝の英国において、女性が画家や彫刻家、或いはデザイナーという芸術を仕事として職に就くことは、女性の男性社会に対する経済的挑戦として、また既成の文化に対する挑戦として見なされ、何よりも、芸術の本質と地位に関する (西洋の) 信念に挑戦することと考えられたのである。というのは、当時女性は芸術と職業に関して言えば、性別と階級という二重の社会規範に縛られていたからである。労働者階級の女性が仕事としてものを作ることは認められうることであったが、その品物について芸術性を求められることはなかった。一方、中流階級の女性たちは個人的教養として、また上流階級の女性たちにとっては生まれつきの素養として、「淑女」らしい芸術性を備えていることが期待されていた。しかし彼女たちは、決してそれを仕事とすることはなかった。なぜならば、趣味の枠を越え創作すること、芸術家として仕事をもつようであれば、彼女たちはもはや淑女とは見なされなかったからである。つまりはパメラ・ナン (Pamela Nunn) の言葉を借りれば「どの階級の女性も芸術と呼ばれるものを作ることはないので、女性芸術家は存在しない」のである (Nunn 5)。

こうした風潮の中、なぜ女性挿絵画家は容認されたのだろうか。『アトリエの天使』 (*Angel in the Studio*) の著者、アンセス・カレン (Anthes Callen) は、挿絵のもつ芸術的、職業的特異性を次のように述べている。

...particularly with the increase in artistic mass-produced books, especially children's books, women were widely employed to produce illustrations for them: women were thought to be most able in this field, and it also seems to have felt that women must know more about children than men, and that they were therefore better equipped to illustrate children's books. (Callen 200)

児童書が大量生産されると、その挿絵を描くために女性が数多く雇われたが、それは女性がその分野、つまり子供に関する分野に最も適していると考えられたからである。つまり、当時女性に許されていた「乳母」「女家庭教師」といった仕事と同様、「子供」に関係する仕事であるために容認されたのである。更に女性作家と同じように、挿絵の仕事は、家庭に居ながら、家族に囲まれてできる仕事であったことも、女性の仕事として容易に受け入れられた大きな要因でもあった (Smith 313)。

社会自体の変化が、先に述べた女性像や家庭像に関する価値観の変更を余儀なくさせたこと

も間接的要因として挙げられる。即ち、女性の社会進出を容認せざるをえない状況が生まれたのである。所謂「余った女」(‘Odd Woman’)として自らの生活のために、また苦しい家計を助けるという経済的理由のために、或いは女性にも男性と同等の創作権利があることを主張し、自らの自己表現のために、または、生まれ育った家庭環境ゆえに、様々な理由で女性挿絵画家たちは筆を取ったのである。こうして、数の多さに於いても、またケイト・グリーンナウェイやポターのように芸術的技量や経済的成功という点に於いても、19世紀ヴィクトリア朝に於ける女性挿絵画家の存在は時代を表わす一つの特徴として留意すべき問題ではないだろうか。

英国の国勢調査によると、挿絵画家に限らず、自分を芸術家と認識していた女性は、1841年には278人であったのに対し、1871年には1069人と非常に増加している。このことは女性自身の意識の変化や、社会の変化を反映した数字と評価できるかもしれない。しかし、スミスが「多くの女性が挿絵画家となったが、現在驚くべきほど少数しか知られてはいない」と指摘しているように、女性挿絵画家の存在は今改めて再評価されるべき問題なのではないだろうか (Smith 319)。

本論は、日本イギリス児童文学中部支部懇話会 (於中部大学、1998年9月19日) に於いて「19世紀イギリス児童書の挿絵 — Mrs Molesworthを中心に — 」と題し、依岡道子氏と共同発表を行ったものに加筆・訂正したものである。依岡道子著「モルズワース夫人の児童書における挿絵画家(1) — ウォルター・クレインを中心に — 」は『名古屋女子大学紀要第45号 (人文・社会編)』に掲載。

References

- Callen, Anthes. *Angel in the Studio: Women in the Arts and Crafts Movement 1870-1914*. London: Asrtagal Books, 1979.
- Dalby, Richard. *The Golden Age of Children's Book Illustration*. London: Michael O'Mara Books Ltd., 1991.
- Doyle, Brian, compiled & ed. *The Who's Who of Children's Literature*. London: Hugh Evely Ltd., 1968.
- Goldman, Paul. "Children's Illustration in the Sixties." *Children's Books History Society Occasional Paper* 4, 1995: 2-15.
- . *Victorian Illustration: The Pre-Raphaelites, the Idyllic School and the High Victorians*. Hants, England: Scolar Press, 1996.
- Hearne, Betsy, Larry DeVries. *Beauty and the Beast: Visions and Revisions of an Old Tale*. Chicago: The University of Chicago Press, 1989.
- Hodnett, Edward. *Five Centuries of English Book Illustration*. Aldershot: Scolar Press, 1988.
- Horne, Alan. *The Dictionary of 20th Century British Book Illustrators*. Woodbridge, Suffolk: Antique Collectors' Club Ltd., 1994.
- Houfe, Simon. *The Dictionary of British Book Illustrators and Caricaturists 1800-1914*. Woodbridge, Suffolk: Antique Collectors' Club Ltd., 1978, 1981.
- Johnson, Diana. *Fantastic Illustration and Design in Britain, 1850-1930*. Museum of Art, Rhode Island School of Design, 1979.
- Julian, Linda Anne. "Louisa Molesworth." *DLB* 135: 226-33.
- Mahony, Bertha E., Louise Payson Latimer, Beulah Folmsbee, compiled. *Illustrators of Children's Books 1744-1945*. Boston: The Horn Book Inc., 1947, 1970.
- Muir, Percy. *Victorian Illustrated Books*. London: Portman Press, 1971.
- Nunn, Pamela Gerrish. *Victorian Women Artists*. London: The Women's Press Ltd., 1987.
- Peppin, Brigid, Lucy Micklethwait. *Dictionary of British Book Illustrators: The Twentieth Century*. London: John

- Murray Ltd., 1983.
- Reid, Forrest. *Illustrators of the Sixties*. London: Faber & Gwyer, 1928.
- Ruskin, John. *The Art of England: Lectures Given in Oxford*. N.Y. & London: Garland Publishing Inc., 1979.
- Sketchley, R. E. D. . "Some Children's Books Illustrators." *A Peculiar Gift: Nineteenth Century Writings on Books for Children*. Lance Salway selected & ed. Harmondsworth: Kestrel Books, 1976: 260-80.
- Smith, Louisa. "Minor Illustrators, 1880-1914." *DLB* 141: 313-21.
- Whalley, Joyce Irene, Tessa R. Chester. *A History of Children's Book Illustration*. London: John Murray Ltd., 1988.
- White, Gleeson. *English Illustration 'The Sixties': 1855-70*. London: Redwood Press Ltd., 1897, 1970.
- Williams, Harriet P. . "L. Leslie Brooke." *DLB* 141: 50-8.
- 上笙一郎 「挿絵=イラストレーションの思想 — 対話のかたちで」 『日本児童文学』 1995年。
- 谷田博幸 『ヴィクトリア朝挿絵画家列伝 — デイケンズと『パンチ』誌の周辺—』 図書出版社、1993年。
- 村上直之 『近代ジャーナリズムの誕生 — イギリス犯罪報道の社会史から』 岩波書店、1995年。

Appendix: A List of Major Illustrators of Mrs Molesworth's Children's Books
(Alphabetical order)

- | | |
|---|---|
| Attwell, Mabel Lucie
(Mrs H.C. Earnshaw, 1879-1964)
<i>The February Boys</i> (1909/CB) | <i>The Carved Lions</i> (1895/M)
<i>The Oriel Window</i> (1896/M)
<i>Miss Mouse and Her Boys</i> (1897/M) |
| Barnes, Robert (1840-95)
<i>The Bewitched Lamp</i> (1891/CB)
<i>Robin Redbreast</i> (1892/CB)
<i>Blanche</i> (1893/CB)
<i>Olivia</i> (1893/CB) | Crane, Walter (1845-1915)
<i>Tell Me a Story</i> (1875/M)
<i>Carrots: Just a Little Boy</i> (1876/M)
<i>The Cuckoo-Clock</i> (1877/M)
<i>Grandmother Dear</i> (1878/M)
<i>The Tapestry Room</i> (1879/M)
<i>A Christmas Child</i> (1880/M)
<i>The Adventure of Herr Baby</i> (1881/M)
<i>Rosy</i> (1882/M)
<i>Two Little Waifs</i> (1883/M)
<i>Christmas Tree Land</i> (1884/M)
<i>Us: an Old-fashioned Tale</i> (1885/M)
<i>Four Winds Farms</i> (1887/M)
<i>Little Miss Peggy</i> (1887/M)
<i>A Christmas Posy</i> (1888/M)
<i>The Rectory Children</i> (1889/M)
<i>The Children of the Castle</i> (1890/M) |
| Baumer, Lewis C. E. (1870-1963)
<i>The Green Casket</i> (1890/HB)
<i>The Three Witches</i> (1900/M)
<i>My Pretty, and Her Little Brother Too</i> (1901/CB)
<i>The Bolted Door</i> (1906/CB)
cf. <i>Miss Bouverie</i> (1901, 1880/HT)
<i>Hermie</i> (1898, 1881/R)
<i>Hoddie</i> (1897, 1882/R)
<i>The Boys and I</i> (1898, 1883/R) | Dadd, Frank. (1851-1929)
<i>Letlice</i> (1884/CKS)
<i>The Abbey by the Sea</i> (1887/CKS) |
| Brooke, Leonard Leslie (1862-1940)
<i>Nurse Heatherdale's Story</i> (1891/M)
<i>The Girls and I</i> (1892/M)
<i>Stories for Children</i> (1893/M)
<i>Mary</i> (1893/N)
<i>My New House</i> (1894/M)
<i>Sheila's Mystery</i> (1895/C) | |

- | | |
|---|--|
| <p>Edwards, Mary Ellen (1839-c.1910)
 <i>The Boys and I</i> (1883/R)
 <i>Neighbours</i> (1889/HT)
 <i>Little Mother Bunch</i> (1890/H)
 <i>The Story of a Spring Morning and other Tales</i> (1890/L)</p> <p>Finnemore, Joseph (1860-1939)
 <i>Phillipa</i> (1896/CB)</p> <p>Hammond, Gertrude E. Demain (1862-1953)
 <i>The Little Old Portrait</i> (1884/S)
 <i>Jasper: a Story for Children</i> (1906/M)
 <i>The Little Guest</i> (1907/M)
 <i>Fairies—Of Sorts</i> (1908/M)
 <i>The Story of a Year</i> (1910/M)
 <i>Fairies Afield</i> (1911/M)</p> <p>Hatherell, William (1855-1928)
 <i>The Next Door House</i> (1893/CB)</p> <p>Hennessy, William John (1839-1917)
 <i>An Enchanted Garden</i> (1892/N)</p> <p>Millar, Harold R. (1869-1940)
 <i>The Wood Pigeons and Mary</i> (1901/M)
 <i>Peterkin</i> (1902/M)</p> | <p>Mrs Hope, Adrian (-1929)
 <i>The Old Pincushion;</i>
 <i>or, Aunt Clotilda's Guests</i> (1889/G)</p> <p>Morgan, Walter Jenks (1847-1924)
 <i>Friendly Joey, and other Stories</i> (1896/C)</p> <p>Paton, Joseph Noël (1821-1901)
 <i>Silverthorns</i> (1898/M)</p> <p>Pitman, Rosie M. M. (fl.1883-1907)
 <i>The Magic Nuts</i> (1898/M)</p> <p>Rainey, William H. (1852-1936)
 <i>White Turrets</i> (1896/CB)
 <i>Meg Langholem:</i>
 <i>or, The Day after Tomorrow</i> (1897/CB)</p> <p>Thomson, Hugh (1860-1920)
 <i>This and That, a Tale of Two Tinies</i> (1899/M)</p> <p>Woodville, Richard Caton, Jr (1855-1927)
 <i>A Charge Fulfilled</i> (1886/CKS)</p> <p>Woodward, Alice B. (1862-1911)
 <i>The House that Grew</i> (1900/M)</p> |
|---|--|

cf. Harriet M. Bennett
 E. Eamshaw
 Ernest Howard Shepard

Herbert A. Bone
 Maud C. Forster
 Percy Tarrant

Gordon Brown
 Fred Hyland

Publishers:

- | | | |
|----------------------------|----------------|-----------------------------------|
| (CC) Cassell & Co. | (CB) Chambers | (CKS) Christian Knowledge Society |
| (G) Griffith, Farran & Co. | (HT) Hatchards | (HB) Hurst & Blackett |
| (H) Hutchinson & Co. | (L) Longmans | (M) Macmillan & Co. |
| (R) Routledge & Sons | (S) S.P.C.K. | (N) Not Mentioned |